

桂川連理柵

初代 吉田玉男／談

森西真弓／記

〈出典：『吉田玉男文楽藝話』日本芸術文化振興会、平成19年9月〉

いわゆる辛抱立役の中でも、一番早くに持ったのが、帯屋長右衛門です。最初は昭和二十五年四月の四ツ橋文楽座。戦後、文楽が二派（因会、三和会）に分裂して人手がなかったため、こんな難しい役が、当時三十一歳だった若輩の私に回ってきたのでしょう。この時は「帯屋」だけの上演で、儀兵衛は玉助さん、信濃屋の娘お半は亀松さん、丁稚長吉は玉市さん、お絹は紋司時代の玉五郎さん、帯屋の隠居繁齋は登一（後の淳造）さん、その後妻おとせは兵次さん、当然周りは先輩方ばかりでした。

私が入門して以降の戦前では、玉幸時代の玉助さんも何度か勤めておられますけど、私には政亀さんの長右衛門が目に残っていましたので、初めはそれをお手本にしました。とはいえ、手数をなぞるのが精一杯。それまで、そんなじっと辛抱して座っているだけの役は経験がありませんでしたし、劇中の長右衛門は四十歳近い年齢設定なのに、実際に遣う私は三十歳を出たばかり。どうしても役が映りません。辛抱立役というだけあって、しんどい役で、前半はほとんど動きがなく受身の芝居だけ。若い間は間が持たず、いい役とは思えませんでした。それが、回を重ねていくうちに自分なりに考えて役づくりを工夫出来るようになり、徐々に好きな役の一つになっていった。今から思うと、早くに長右衛門をやらせてもらったお蔭で、その後の「堀川」（『近頃河原の達引』）の伝兵衛や「炬燵」（『天網島時雨炬燵』）の治兵衛など、同じような辛抱立役を演じる時に役立ちました。

ただ、同じ世話物の辛抱立役でも、長右衛門の首は検非違使です。源太を用いる二十代の伝兵衛や治兵衛と違って中年の役で、眉も動き、目はネムリ目です。だからといって始終眉を上げたり、目を閉じたりはしませんけど、一応は分別ある大人の男です。その中年男が隣家の十四歳の少女と懇ろになり、果ては心中までしてしまうという話で、世上の興味を惹きやすいのと、儀兵衛や長吉のチャリの演技の面白さ、また貞女なお絹の健気な姿など、多様な人間模様が描かれているところから、人気演目の一つとして戦前からくり返し上演されてきました。私も五十年以上にわたって長右衛門を中心に出演しています。上演回数を数えたことはありませんけど、かなりの数字になっているのではないのでしょうか。

「帯屋」の前半は耐えに耐える。当主とはいえ養子の身の上。後ほど明かされますが、五十両をめぐるお絹の弟をかばっていることや若き日の過ちなどもあり、どれだけ義母のおとせや義弟の儀兵衛にいたぶられても言い訳はせず、じっと俯いている。お絹と二人だけになって、女房の述懐を聞いている間も申し訳なさで一杯です。しかし、ここからは長右衛門もお絹に真実を打ち明け、石部の宿でのお半との一件についても説明と詫びをしますもので、仕どころがあり、心理描写がしやすくなる。それでも、役がそれらしく映るようになったのは、自分自身が四十歳を越えてからでした。それからは面白み、やり甲斐が生まれる

ようになりました。

いったん蒲団に入って寝入ったところへお半が現れます。そこからが段切、そして道行（「朧の桂川」）では、物語が急展開し、人形の動きも多く、若い頃はやれやれこれで楽になると思ったものです。お半の書置を読んでびっくりし、追いかけて行った後、一度家に戻ります。この時、動転して慌てている様を解けた帯で表します。小幕の中で、結んであった帯を解いて、だらりと右に垂らす。その姿で行灯に手を置いて後ろ向きになるところは決まりの型です。その後、十五年前の心中未遂のことから、お半を、その時一人死んでいった相手の芸子岸野の生まれ変わりと思い決め、自らも命を捨てる覚悟を固める。中年で検非違使の首の長右衛門ですが、そういう前歴の持ち主であり、また、今も年若い女性に慕われるだけの滲み出る色気が求められます。

長い間に、いろいろな人のお半と共演しましたが、思い出に残っているのはやはり文五郎師匠ですね。昭和三十二年三月、道頓堀に移っていた文楽座（後の朝日座）で初めてお相手していただいています。私よりちょうど五十歳年上の師匠はこの時八十八歳。その文五郎師匠が遣われる十四歳のお半の何とも言えず可憐なこと。無類でした。今でもその可愛らしさが目に浮かぶようです。お半は「帯屋」の最後だけ出て来ますので、その後も、九十二歳で亡くなられる最晩年まで持っておられた。道行がつく時は、そこだけ他の人が代わっていました。

道行では、長右衛門がお半を背負うて出ます。帯屋のあった虎石町、柳馬場押小路というと今のどの辺り？ 京都大丸（大丸百貨店京都店・四条烏丸の付近）よりずっと北ですか。そこから桂川まではかなりの距離ですから、まだ子どもの足では疲れたのでしょうか。でも、長右衛門には、その昔の岸野のことが頭にあり、ここは恋人同士の気持ちになっている。長右衛門の頬冠りは、以前は何でも完璧でないと気が済まず、自分でやっていたけど、近年は弟子がしっかりしてきましたので任せています。そんなことも含め、長右衛門のような役は口で教えられるものではなく、何事も見て覚えるしかありません。

戦前から「帯屋」を中心に単独で、もしくは前後に「六角堂」をつけたり、「道行朧の桂川」をつけたり、といった形で上演されてきました。長右衛門とお半が過ちを犯してしまう「石部宿屋」を復活上演したのは、国立劇場が開場して後のことです。昭和四十三年十一月に先代喜左衛門さんの作曲、山村楽正さんの振付で、この時も私は長右衛門で出ていました。この場面があると、「帯屋」で長右衛門が立たされている辛い立場がよく分かる。

長年にわたって、また数多く、長右衛門を勤めてきましたが、昭和五十四年九月国立劇場の公演では、清十郎君の長右衛門につき合って、儀兵衛を持っています。以来、地方公演でもやっていますし、国立文楽劇場の文楽鑑賞教室では、午前の部が長右衛門で、午後の部が儀兵衛という配役もあった（平成四年六月）。平成十一年五月には四国の内子座で遣いました。

儀兵衛の演技は、長右衛門でずっと後ろから見ていましたし、戦前には、初代栄三師匠の足を何度か持たせていただきました。いえいえ、長右衛門ではなく儀兵衛です。儀兵衛は栄

三師匠の持ち役だったのですよ。意外ですか？ イメージに合わない？ 難しい顔をして、実に軽妙に遣われましたよ。お若い頃は長右衛門もお半もなさっているようですが、私は儀兵衛しか拝見していない。そんなわけで儀兵衛は全て栄三師匠写しです。悪い奴ですが笑い上戸のようなところもあって、ユーモラスな表情をした手代てだいの首かしらで口も開く。長右衛門にはいけずなことを言いますが、頭を柱に打ちつけてしまったり、長吉を相手にした芝居は滑稽で、おどけた振りもあり、すべて長右衛門とは対照的に動きが多種多彩。やっついて楽しく面白く、また、お客様にも受ける儲け役です。

うちの師匠たまじろう（玉次郎）は、“御馳走”で長吉を持っていました。長吉は、後には紋十郎もんじゅうろうさんや、近年では箕助君みのすけもやっている。涙垂れの丁稚はなたですが、ませたことを言い、これまた客受けするいい役。私も外部公演で持ったことがある。お絹は経験がありません。夫を思う貞女でいて、しかも気丈なところもある。似たような役の「紙治」（『天網島時雨炬燵』）のおさんを持っていますので、お絹もいっぺんやってみたかったですね。

さて、長右衛門では、平成十一年七月国立文楽劇場でのことが印象的です。この時のお半は箕助君。前年十一月の同劇場で『仮名手本忠臣蔵か な で ほんちゆうしんくら』を上演していた時、箕助君は突然脳梗塞で倒れてしまった。すぐに病院へ運ばれましたけど翌日からは休演。以来、半年以上のつらいリハビリを経て復帰した最初の役がお半でした。初日を待ちかねて駆けつけて下さったお客様から大きな温かい拍手を受けて、彼も感無量のようでしたし、私も舞台に戻って来てくれたことが本当に嬉しかったものです。